The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学校で働く教師たちとのナラティブ的探究 ：教師の悩みからわかること
Author(s)	末吉, 朋美
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60056
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【15】

氏　　名	末吉朋美（すえよしともみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文学）
学　位　記　番　号	第　２６０５８　号
学位授与年月日	平成25年３月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**日本語学校で働く教師たちとのナラティブ的探究 ー教師の悩みからわかることー**
論文審査委員	（主査） 教　授　青木　直子 （副査） 教　授　石井　正彦　　准教授　マシュー・バーデルスキー

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は日本語学校で非常勤講師として働く３人の日本語教師を対象に、１年間にわた

る語り合いと、その後の個別インタビューをデータとして、これらの教師たちがどんなことに悩み、その悩みの原因は何であり、どのように解決できるのかを探ったものである。本論文は４部構成となっており、第一部は４章、第二部は７章、第三部は６章、第四部は２章からなっている。参考文献リスト、図表、付録および資料も含めＡ４判、351ページ、400字詰め原稿用紙で約1,200枚分に相当する。

第一部第１章では申請者自身が大学院に進学するまでの経験を述べ、第２章でナラティブ的探究という方法論との出会い、第３章では修士論文を書く過程での経験、第４章では本研究の学問的・社会的背景と調査の概要について書いている。

第二部第１章から第５章までは、約１年間にわたり、14回行われた語り合いの場でどのようなことが話し合われたのか、申請者を含む４人の関係がどのように変化したか、また、研究協力者３人にどのような変化が観察されたかについて書いている。第６章では、この語りの場にどのような効果や問題があったのかについて考察し、第７章では、第二部のまとめとして語りの場の意義について述べている。

第三部第１章から第３章では、それぞれ一人の研究協力者への個別インタビューを分析し、各教師が語りの場に参加したことでどのような影響を受けたのかさらに深く検討するとともに、彼女たちが自己のこれまでを振り返ることでどのように自分の悩みに新たな意味づけをし、悩みを克服したのかを書いている。第４章では研究の過程で得た申請者の自己理解について述べ、第５章では、教師の悩みの根源について、教師個人の過去の経験や多くの教師に共有されるビリーフから生まれる教師や学生の理想像と、日本国内における日本語教育の現状や日本語教師の大半を占める女性の社会的地位という日本語教師を取り巻く社会状況の二つの側面から考察している。第６章は第三部のまとめである。

第四部第１章では、第二部と第三部とを比較し、語りの場と個別インタビューで起きたことは何が違うのかについて考察し、語りの場について今後どのような課題があるのかを述べている。第２章は、本論文全体のまとめである。

論文審査の結果の要旨

本論文は日本語学校で働く非常勤講師を対象に、彼女らの悩みを理解し、解決の糸口を探ることに、ナラティブ的探究という教師研究への新たなアプローチを用いて、正面から取り組んだ研究である。日本国内で働く日本語教師の大半が日本語学校で働く非常勤講師であり、その大半が女性であるという現実を反映したテーマ設定であり、これらの人々を対象とした研究がほとんどないという点でも、社会的・学問的意義の大きい研究である。語り合いのデータ収集に１年、その後の個別インタビューにそれぞれ１年前後の時間を費やして、膨大なデータを収集し、それを丁寧に分析している。それによって、教師の悩みが生まれるメカニズムを記述できたのは大きな成果である。さらに、語り合いの場と個別インタビューで起きたことを比較検討することで、教師がよい方向に変わっていくために必要なファシリテーションの条件を、ナラティブ的探究の枠組みから提示することができた意義も大きい。また、教師の悩みを個々の教師の個人的な問題であると同時に、教師が置かれている社会的な文脈の影響による普遍的な問題としても位置づけて議論しているのは、日本語教育研究の中では珍しいことであり、評価できる。複数の人が関係する複雑な過程を詳細に、且つわかりやすく描き出した文章力も注目に値する。

本研究に弱点がないわけではない。その一つは、教師研究という学問領域全体の中での本研究の位置づけが明確に示されていないということである。ナラティブ的探究の範囲にとどまらず、教師研究の研究史全般の中での本論文の価値が論じられていないことが惜しまれる。また、ナラティブというもの自体についても、その研究史と本論文のとる立場についての言及があれば、本論文の議論はさらに厚みを増したであろうと思われる。さらに、一部の章で会話分析の手法を使って、語り合いの場で起こる教師の微視的な変化を記述しているが、欲をいうなら、こうした手法を体系的に使うことで、語り合いや個別インタビューの異なる段階で、異なることが起きていたのをより説得力をもって示せたのではないかと思われる。しかし、これらの弱点は本論文の博士論文としての価値を減じるものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。